

---

# 猛暑

篠義

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

猛暑

### 【ZPDF】

Z0076Q

### 【作者名】

篠義

### 【あらすじ】

関西夫夫

関西弁で、字書きはできるのか？ で、はじました、このお話。

意味がわからない言葉があれば、連絡ください。はははは。

「暑い、暑い、暑い。」

「ガリガリ君でも食うとけ。」

「もう、ええやろ？ 花月。なあ、もう、勘弁して。俺が悪かつたから……も、言わへんからつ。」

「まだ、あかん。」これも体調管理の一環や。」

本日は、今シーズンの最高気温を記録するだらうといふ晴天の日。洗濯は、さつさと乾くし、空には雲ひとつない。どつかのあほが、「心頭滅却すれば火もまた涼し」と、あほなことを言つて、クーラーを切つた。新聞を読んでなかつたという敗因はあるのだが、俺の提案に飛びついたのは、水都のほうだ。

「がまん大会をして負けたもんが、飲料水の買出しに行く。」

「・・ふふふ・・俺は勝てる自信がある。やつたうやないか。」

「

「ほんなら、今からな。」

「おう。」

と、ぽちつと、クーラーの停止ボタンを水都は切つた。それが昼前のことだ。ただいま、午後三時。窓を全開にしても風がないから、ただ暑いだけという状態で、じろじろと廊下に転がつていた水都は、

すでに泣きを入れていて。こいつの場合、普段から職場で、たくさん  
のコンピューターが放出する熱を下げるために、かなり低い温度  
に設定された場所で働いている。人間よりも、コンピューターの熱  
暴走を阻止するための温度設定だから、そこは完全に冬の世界だ。

対して、俺は公務員。税金を支払ってくれる皆さんからのご要望により、温度設定28度という暑い世界で暮らしている。はつきり言つて、暑い。クールビズでも暑いという職場だ。勝負なんて見えているのに、それに気付かないのが、俺の嫁だ。

まあ、勝敗なんて、どうでもええのだ。要するに、その寒い職場にいる俺の嫁の体調を良くしようとすると、半日くらい常温で過ごさせて汗をかかせるほうがいいから、その提案をした。飲料水の買出しなんて、ひとりでは無理な話で、ふたりで行かなければ、箱ものは運べない。

うだうだと融けている俺の嫁は財布を手にして、ふりふりと立ち上がった。

「・・・俺・・・ちょっと散歩してくる・・・」

「おひ、ほんなら、おまえの負けな？」

「もう、なんでもええわ。ビールと炭酸水買おてくるから、クーラーつけて。」

「今はやめといたほうがええと感ひナジな。」

「あほ、こんなところあるへりこやつたら、スーパーで涼むほうがええ。」

普段、田中に外へ出ない俺の嫁は太陽というものを、バカにしている。まあ、ええか、と、放置して玄関から出て行くのを見送った。それから、階段を降りる背中を眺めていたら、炎天下へ出た途端に、へろへろと肩を落として戻ってきた。

一花用  
お願いしたい」とかあるねんけど?

なに？

何してもええから、ケーラーつけて。

「アの魔正術、ハヤシ野ナヌム?」

一 僕の負けです。

「はい、よう掛けました。とりあえず、水風呂入れ。クーラーは夕方まで禁止やからな。後一時間我慢せいや。」

「ええええええええええ」

「その代わり、今夜はタイマーなしで、クーラーかけてもええ。」

「俺死ぬ。」

「いや大丈夫や。死ぬのは夜に、そらもうたつぷりとな。なんせ、明日も休みやし。」

「それ、クーラーかけても意味ないんちゃうん？」

「ニヤニヤ、これでいいしたり、ええ感じやべ。」

「冗談やない、ど、俺の嫁はクーラーのリモコンを探しているが、エヒー、そんなわかる場所に置いてあるわけがない。あつむつちの戸を出しを開けてこなが、そんなとこに隠してこなわけがない。」

「一時間忘れたわいいか?」

「風呂場は痛い。」

「ナビ、涼しこのは風呂場やで?」

だらだらと汗を流していくと、やわらかく茹でているよつだ。なんだか、ちょつとほの一つとしているので、やばい。あんまり茹ぬると熱中症になつそつだから、台所の鍋からリモコンを出した。

「ほひ、エリにあらで?」

「おののクーラーは、各部屋に設置しているが、どれも同じリモコンを使用している。取り上げよつと手を伸ばして来るものと身構えたら、抱きつかれた。おや? と首を傾げたら、嫁の太腿が俺の足の間に割り込んできて、せりあひと動かされる。珍しいお誘いやなあーと、俺が嫁の背中に手を回した途端に、リモコンを取り上げられた。

「なんよ?」

「・・・おまえなんか、ひとりで灼熱地獄で苦しめつ。」

リモコンを手にして、スタスターと、自分の部屋に戻る。するので、慌てて追い駆けた。お互いのプライベートというものが有るから、と、同居当初に、鍵がかかる部屋にしたのだ。

「つれなー」と言になや、水都。

「つるわこわつ。もう暑いのはええんじゃつ。

「せやから水風呂へやな。」

「あの狭いところ一人で入つたら窒息する。」

「……んー……とつあえず、すつきつせたひつと思つたんやけど。まあええか。」

「せりへんつ。」

「俺に火をつけたのは、お・ま・え。」

「あらあー緊急措置じゃつ。勝手に自家発電しとけつ。」

どんつと突き飛ばされて、部屋から強引に追い出された。クーラーをつけた音があるので、やれやれと俺は風呂場へ移動する。別に、リモコンは、あと一個あるから、あれがなくても問題はない。

・・・・天井かい?・・・

ガチャリと鍵をかけていたが、あれはあんまり意味がない。女神様なら、こぞ知らず、ただの人間の俺の嫁は、生理現象というものが

があつて、それにはトイレが必要だからだ。暑い、暑いと麦茶を飲んでいたから、そのうち出てくるだろう。そこを捕獲すればよいことだ。

・・・あー、やる前に、飲料水の買出しだけ付き合わせなあかんな。  
・・・・

それさえ済ませたら、明日も休みなので、のんびり朝寝をしようと考えている。連休ではあったのだが、暑くて、どこかへ出かけようという気分にはならなかつた。だから、一人して、バカバカしい我慢大会などやっていたりする。水風呂で、すつきりした俺は居間に戻つた。

かちやり

嫁の部屋の扉が開いたので、えら早やな、と、思つたら、水都が、ちょいちょいと手を動かして呼んでいる。

「なんよ？」

「涼みにきやへんか？」

「それは、お誘いなん？」

「いや単なる涼み。買出行かなあかんから、そつちは夜に。」

「買出しは、一人で行くさかいな。」

「やうか、おおきに。せやけど使い物にならへんのは問題やから、そつちは夜。」

「やつちて何よ。」

「そつちまわはひちじやせつ。」

なんで、今更、そんな単語で照れるのか、かなり疑問だが、まあ、そういうところが可愛いといえば可愛い。ふたりして、夕方までクーラーの部屋で骨寝をした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0076q/>

---

猛暑

2011年1月16日07時55分発行